

た傑作で一同を感服せしめ将来を嘱目された。このあと八月の例会は趣をかえて十一日の午後洛西の名勝嵐山渡月橋畔の料亭で涼風にひたりながら一夕を楽しむことに一決(予告欄参照)、引続き一盞を傾けて夕食を共にし八時なごやかに散会した。(出席者)馬場鴨水、林旭朗、楊嶽水、田中歌水、梅原旭齋、矢吹旭美津、山岡旭清、牧雨水、荒木旭媛、桜井旭富、水内煥水、平井春嶺、植村真水。

久徳正彦氏叙勲

神戸市葺合区八幡通四丁目の久徳旭蘭女史の夫君正彦氏は多年にわたるブラジル移民送出に功ありとして去る四月賞勲局から叙勲の沙汰があり五月十日旭蘭夫人同伴東上外務省にて外務大臣から勲五等瑞宝章の勲記勲賞を受け皇居に参内して天皇陛下に拜謁し激励のお言葉を賜り感泣して退下されたとの事、目下たい限りである。

テレビドラマ「風の隼人」に琵琶演奏

八月八日(内)から始まるNHK・TV放映の首記に薩摩琵琶の普門義則氏が俳優中村伸郎の紛する納所笑左エ門の琵琶演奏の場面を指導し普門氏も携を動かす手が大写しに画面に出る。八月十五日夜八時放映される予定。

ラヂオ琵琶放送

七月十二日(内)午後三時十分NHK・F.M.狩野の雨-平山万佐子、大高源吾-都錦穂両

第五十一回筑前琵琶演奏 七月十七日(火)夕四時神戸市長田神社夏越祭、神戸旭岡会奉奏 (次号詳報)
 祇園祭協賛各派合同琵琶演奏会 七月二十三日(月)夕五時京都祇園八坂神社能楽殿、協賛京都琵琶協会 (次号詳報)

(予告)

○京都琵琶協会八月例会 八月十一日(出)午三時集合(晴雨不問)洛西嵐山渡月橋北岸百メートル西(舟つき場前)料亭対嵐坊(電話八六一〇七五四番)。七時過ぎ解散予定。
 ○琵琶三美会演奏会 八月十九日(日)十時半京都四条山一証券ホール。筑前、薩摩、錦心流、錦びわの外一絃琴など。(会長矢吹旭美津女史)。
 ○関西新進琵琶演奏会 九月十六日(日)屋大阪天満朝陽会館(主催小川吟水氏)。
 ○筑前琵琶協会全国大会 十月六日(出)屋大阪西本願寺御堂会館。
 ○物故会員追悼演奏会 十月二十一日(日)屋京都東山仁王門前本妙寺本堂。京都琵琶協会・四明会・一水会京都支部共催。
 ○筑前琵琶協会全国大会 十月二十七日、八両日(出)鹿兒島市中央公民館。

きとあ

祇園精舎の鐘の声諸行無常の響あり、娑羅双樹の花の色生者必衰の理を頭わす。娑羅双樹とは山椿のことと思つていたが、実は夏椿のことらしい。白椿に似た夏椿の、雨を含んだ白い蕾が手を触れた途端ポロリと首から落ちてしまふのが如何にも果敢ない。ほのかに咲いて散り急ぐ夏椿の花を娑羅双樹の花と、琵琶歌に縁の深い「平家物語」では取上げたものと思われる。筆者は浅学にして夏椿と山椿を間違つて解釈していた、誠に恥づかしい次第。『平家物語』に限らず古典古語にはよくこうした誤解を招くような言葉が使われている、どうでもよいようなものであるが正確に考えるに越したことはあるまい。暑い時に暑苦しい話題を提供して恐縮。今年の梅雨はカラッユかと思つていたら六月下旬になつて五日も六日も絶え間なしの豪雨の来襲で各地に相当の被害を出した模様、被災者の方々にはお気の毒である。一方、関東方面では降雨量が少ないために節水云々の報道がなされていたがこれまた困つたこと世の中は仲々思うようにならぬ。梅雨が終つてカンカン照りの真夏の太陽はまたひとしお応える。全国絃友同好各位の御自愛を切に祈る。

昭和五十四年八月一日発行(非売品)
 編集者 植村 真 社水
 発行所 高槻市津之江北町一ノ二番
 〒569 電話〇七二六(七三)六〇五一番

琵琶
 機関紙

京

絃

第三〇二号 京 絃 社

琵琶 (一〇)

忘れられんとする音の世界

村山道宣



盲僧派と当道派の抗争の中から(上)

抗争の原因

近世の初期に、九州・中国地方の盲僧達にとって、非常に大きな問題が起つた。それは、当道派が盲僧をその支配下に加えようとするものであった。盲僧派にとって、それは忍びがたい屈辱であり、彼等の行く末を決する重大事でもあった。では一体何故にこのようなことが起つたのであろうか。

九州の盲僧達は、近世に近づくとともに、「妙音講」を中心に各地域ごとに序々に組織的なまとまりを見せるようになっていった。そして彼等は盆祭や地神祭などの祈禱を行うだけにとどまらず、「くすれ」などの遊芸なども行うようになり、次第に芸能的性格を強めていったのである。

近世初期、両派の間に起つた各地での数々の争議に於いては、幕府の権力を後楯にし、組織力にまさつていた当道側に有利な裁断が

当道派の圧力

密にしていった当道派は、盲人の様々な職業者を組織する自治的集団となつていった。そして当道派は京都四条の職屋敷を本拠とし各地に仕置屋敷を置き、盲人の職業者を支配していった。この頃には、既にかなりの数の当道に属する座頭が各地にいたようである。そして平家座頭の下層の者達の中には、地神経読みをするなど、盲僧の祈禱行を取り入れる者達が多かった。当時の盲僧と当道派の平家座頭の所業の中には互いに重なり合つて来たのである。このようことから、両者の間に縄張り争いや、盲人の弟子の奪い合いなどの争いが起きてくるのは当然の成り行であつた。

下されるのが常であつた。

当道側では盲僧が、かなりの勢力を持ち、地神経を誦んだり祭文を唱えるというだけにとどまらず、平家ものまがいの物語など、いわゆる「くすれ」を演唱するといふことを知り、寛永の初め(一六二〇年頃)盲僧派に対し、書状を出したのである。書状の内容は次の様なものであつた。当道派に加わり、職屋敷(職屋敷の最高位の検校)の支配下に入ることも、もしこれに応じない場合は、
 一、今後袈裟、法衣を着用してはならない。
 二、院号は、勿論、検校、勾当など当道の官位とまぎらわしいものを用いてはならない。
 三、琵琶の絃に絹糸を使つてはならない。
 四、琵琶の駒(柱)は作り付けにして、取りはずしてはならない。
 等。(『昔幻書』)

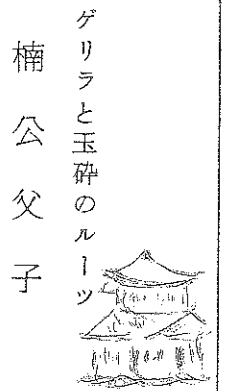
自らの縁起、修法などに誇りを持ち、既に西国に於いてかなりの勢力を得ていた盲僧達にとって、この様な当道側の一方的な通達に従うなどということはもつての外のことであつた。

なお、当道派との争いの一因となり、盲僧達がかつて盛んに行つていたくすれといふのは、合戦物を主とする余興的な琵琶説経を総称するものとみられる。さらにくすれは肥後琵琶の語り物、豊後浄瑠璃なども共通するものである。この様に、盲僧達により、各地で盛んに行われていたくすれは、源平物も含んでいたため、当道派にとって、正に脅威の

存在であった。西国に於ける当時の盲僧達の勢力は、時の権力に近い当道側にさへ、脅威を与えるほど大きなものだったのである。ところで、こうして当道派との対立が激しくなると、盲僧達は当道派に対抗し、さらに民衆に対する彼等の宗派的権威を確保するために、仏教宗派との組織的な支配關係を必要とするようになって行った。そして彼等は、その後おもに天台宗へと接近して行くことになる。

しかし、延宝二年(一六七四)、当道派の訴えを幕府が取り上げ、公事となり、ついに盲僧派は完膚なきまでに敗れた。そして、この時より盲僧達は、院号、官位、袈裟衣を禁じられ、更に音曲、遊芸をもって渡世することも禁じられたのであった。幕府に近い当道側の一方的勝利となったこの裁決は、かねてから比叡山との関わりを喧伝し、その呪術的宗教に宗派的権威を与えながら、また庶民の要求に応え、くずれなどの語り物を演じつつ、当道派に対抗し近世的脱皮を図って来た盲僧派にとって大きな打撃となった。

その後、百年余りの長きにわたり、盲僧達にとって苦しい忍従の時代が続くが、その間にも盲僧達は執拗に請願を続けていた。そうした努力が、天明三年(一七八三)についての効を奏し、北九州・中国地方の盲僧達は京都の青蓮院(天台宗)の配下となることで、当道派の攻撃から脱することが出来たのである。



楠公父子 佐藤忠男

明治から敗戦まで、日本の学校の道徳教育は忠義第一に徹してきた。ここで歴史上、いつも忠臣の筆頭にあげられ、くりかえし子供たちに教え込まれてきたのが、南北朝時代の南朝随一の名将楠正成であった。正成が湊川の合戦で弟正季と刺し違えて死ぬ直前に云ったと伝えられる「七たび生れかわって君国につくそう」という言葉は、昭和の大戦中には特攻隊のスローガンのようにさえもなった。

忠義という徳目の否定された戦後では、楠正成について語られることはあまりない。しかし正成は、軍国主義の時代にだけあってはやされたわけではない。正成は「太平記」のヒーローである。江戸時代には講釈師によって「太平記」が読まれた。つまり民衆にもっともよく知られた叙事詩的英雄の一人だった。勿論忠臣として語り伝えられたのが、単に忠臣として以外にも英雄として親しまれる要素は少なくない。

第一に、正成は日本史上もっとも傑出したゲリラ戦士であったと考えられる。千早城、赤坂城という簡単なとりでを基地にして繰り

広げられる機智に富んだ神出鬼没の戦いぶり、子供たちの血を湧かせた。少数精鋭で敵の大軍を引きつけ、がけ下に寄せて来た敵に熱湯をあげせたり、ワラ人形を並べ立てて味方大勢居ると見せかけて撤退したり、負けたと見せておいて別のところで蜂起したりする。日中戦争のときの日本軍が、中国軍の戦いかけたこそ楠流だと、もし早くに気付いていたら泥沼には入り込まずにすんだかも知れない。

正成は最後に、負けることを百も承知で湊川で足利尊氏を迎え撃つ。玉碎戦である。日本人は全滅を覚悟の殴り込みというところ、それだけで感動してしまう。大阪夏の陣の後藤又兵衛や木村重成。白虎隊。そして神風特攻隊である。やぐざ映画にまでそういう感情は受け継がれている。そういうイメージの源流として正成の湊川の討ち死にがある。われわれはこういうイメージへの偏愛を何とかして乗り越えなければならぬ。

正成は湊川へ玉碎戦に行くとき、途中で息子の正行を本拠地の河内へ帰らせる。父と共にという正行を、いま死んでは私の志を継ぐ者が居なくなると云ってさすとす。有名な桜井の駅の別れである。「青葉茂れる桜井の」という小学校唱歌の哀調が悲愴さの偏愛を一層濃密にわれわれの心にそそぎこんだ。



大和国十津川郷土 幕末の天誅組として闘う

辻 旭 城



奈良県吉野郡十津川村は、その面積が県全体の15%を占めているが、その九割八分が深い山林で浮世離れをしていて、殆どどの民家は谷間のあちこちに点在する秘境である。

五条市は十津川郷への北側の入口で、バスは南紀新宮市へ通じているが、かつて元和年間から代官所が置かれ、地方政治経済の中心となっていて、幕末には天誅組倒幕の拳がありその史跡が多い。この五条市から十津川村までバス約三時間、筆者は役場前で下車して探訪した。

小又川口から一キロほどの所に「天誅倉」と称する倉がある。ここは、十津川から敗走して来た河内勢の天誅組隊士が捕われ幽閉されていたという。元来この倉は、当時小又川村の農夫嘉助所有の倉だった。

文久三年(一八六三)秋、平和なこの村は突然天誅組の騒ぎに巻き込まれた。天誅組とは攘夷討幕の熱に浮かされた「勤皇」を気取る過激派だが、大和の国で暴れ廻った結果、幕府軍に討伐された事件である。

志士たちは土佐の偏狂な過激派で、吉村寅太郎、那須真吾などの連中が、土佐で参政の

吉田東洋を暗殺の上来たもので、中山大納言の伴忠光を首領に祭り上げて、一足先きに天皇の大和行幸を前に乗り込んで来た。

同年八月十七日、彼等は天下の攘夷討幕の大先鋒を自認して、狂気の学者藤本鉄石、松本圭堂らと腹を合わせ、一行は大和五条指して乗り込んだ。このとき村では丁度孟蘭盆で、家々では何かと忙がしい日々であった。五条の民家を荒らし廻った末、一行は代官所を焼き払い代官らを血祭りにあげた。

天誅組は組員が足りないため、河内附近で隊員を募った。この辺りは昔吉野期の頃から勤皇意識が強く、天誅組の檄の効果は著しく、数千人が馳せ参じたが、有能の士は二十人ほどで、その首魁が甲田村の水郡善之祐長雄という三十八才の男であった。

五条代官所焼討の報を受けた幕府側は、直ちにこれら反逆者の取締りに乗り出し、紀州藩、高取藩の兵力をもって彼等を包囲した。文献によると、水郡善之祐は早くから過激派志士たちと交わり洛中で暴れ廻っていたよう、有名な木像集首事件にも参画していたと云われる。

天誅組は五条代官所焼討ちで意気が大いに上がったが、その直後に政変があり、天皇の大和行幸は中止となった。のみならず、これまでの長州藩の妾動や偽勅の疑いから、三条実美ら過激派の保護者でシンパだった七卿まで、京を離れなければならなくなった。幕府軍の包囲網により水郡ら一隊は立場を

失い、且つ敗色が濃くなると中山忠光以下の勝手な行動で、水郡らに分離逃亡を決意させたので、水郡は伴英太郎をはじめ辻郁之助、鳴川清三郎ら十二人は、暗夜に乘じ十津川街道を南下した。そして天川辻まで来てみると既に有力な幕府軍が待ち構えていて、目ざす河内へ引き返せないで畿越の峠を越え、氣息えんえんで漸く紀州路に入り、東河合村の細道を小又川村へと入った。しかし警戒が厳しく到底脱出は不可能とあきらめ、遂に紀州藩兵へ自首したのである。

十三人のうち五人は、途中幕兵の襲撃により脱落し、結局自首したのは八人だった。そしてこの八人は嘉助によって天誅倉に押込められたという。

祝。京絃創刊三〇〇号

山崎 旭 萃

〒569 高槻市宮田町一ノ六ノ五 電話(九三)三一五九番

暑 中 御 見 舞

〒250-04

神奈川県足柄下郡箱根町強羅
電話〇四六〇(二)二二二番

押川旭葉

筑前琵琶橋会

〒618

大阪府三島郡島本町桜井四ノ
電話〇七五(九六一)五〇四三番

秋元旭晨
竹本旭将

筑前琵琶旭会

〒454

名古屋市中川区中島新町
中川住宅五ノ四〇一号
電話〇五二(三五三)〇二八四番

阿部秋子

琵琶芸術同好会名古屋支部
錦心流琵琶秋声会名古屋本部

〒431-31

浜松市積志町一八三一
電話〇五三四(三四)〇八七一

見陽小野鶴彦

薩摩琵琶鶴絃会

〒194-01

東京都町田市金井町二六一三ノ
電話〇四二七(三四)一一八八番
(小田急線・玉川学園下車)

竹下翠風

かねて新築中の家が出来上りましたので今般左記へ移りました

翠琵琶宗家

暑 中 御 見 舞

〒171

東京都豊島区高松三ノ一二
電話〇三(九五五)三六四五番

藤巻旭鴻

筑前琵琶

大師範

〒617

向日市西向日鶏冠井町山端
電話〇七五(九三一)一六九一番

梅原旭濤

〒606

京都市左京区下鴨藪倉町一六
馬場鴨水方
電話〇七五(七八一)三〇五〇番

一水会京都支部
会員一同

錦心流琵琶

〒570

守口市緑町土居団地一
小川吟水方
電話〇六(九九二)五六二五番

一水会大阪支部
会員一同

錦心流琵琶

〒111

東京都台東区駒形一ノ一ノ五
スズセイビル六階
電話〇三(八四五)二二二番代

研究室

〒348

越谷市大成町一ノ二三九二
電話〇四八九(八二)
一二四一番代

鈴木流泉

日本琵琶振興会長

暑 中 御 見 舞

〒569 高槻市宮田町一ノ六ノ五
電話〇七二六(九三)三一五九番

山崎光椽

大和流琵琶吟家元

山崎旭萃

筑前琵琶橋会宗範

〒520 大津市逢坂一丁目二ノ三一
(蟬丸神社前)
電話〇七七五(二四)九三二八番

松岡旭岡
伊藤旭暢

〒678 相生市相生二丁目一四ノ一七
電話〇七九一二(二)五一八番

浜本旭好

〒653 神戸市長田区梅ヶ香町一ノ一四五
電話〇七八(六七)〇〇一八番

田中旭昇

筑前琵琶日本旭会

暑 中 御 見 舞

〒154 東京都世田谷区太子堂二丁目二番八号
電話 (四一四) 六五七八番

宮崎直二

〒651 神戸市葺合区上筒井五ノ四ノ二
電話〇七八(二二)一一六一番

宝塚専科
上原まり
(旭艶)

筑前琵琶旭堂会
旭会大師範
柴田旭堂

〒544 大阪市生野区小路二ノ二六―二五
電話〇六(七五三)〇三二五番

高千穂旭楓

〒587 大阪市東成区神路三ノ八ノ十八
電話〇六(九八)二二九一―四
六(九七二)二七七八番

榊本旭風

暑 中 御 見 舞

〒836 浦和市別所四丁目一番十五号
電話〇四八八(六一)八〇一九番

花 俣 圭 水

錦心流琵琶一水会本部理事
錦心流一水会瑤玉支部顧問

〒237 横須賀市船越町一ノ五〇
電話 (六一) 三六七六番

山 田 幻 水

横須賀琵琶連盟会長

(予 告)

都派びわ 秋の公演
十月十六日(火)
日本橋第一証券ホール

〒113 東京都文京区根津二ノ一五ノ二
電話 (八二二) 五七〇八番

家元 都 錦 穂
外会員一同

錦・都派琵琶本部

〒602 京都市上京区東堀川榎木町東
電話〇七五(二一一)四〇三三番

中 島 旭 穂
榎 田 旭 波
福 西 旭 紅
森 田 旭 峰

筑前琵琶旭穂会

吟詠
琵琶 赤心流

家元 赤心流鶴翁

〒420 静岡市西草深町二十一番二十号
電話〇五四(二五三)一四七一番

暑 中 御 見 舞

〒189 東京都東村山市美住町一ノ四
久米川公園九ノ二〇四
電話〇四二三(九一)九三二二番

筑前琵琶詩吟教授
旭登会
師範若 宮 旭 登
吟(桂水)

〒113 東京都文京区本郷五ノ二二二三号
電話〇三(八一)七五七四番

会主 輝
外会員一同 錦 凌

錦心流琵琶輝派
輝水会本部

〒570 守口市緑町土居団地十一号
電話〇六(九九二)五六二五番

中 関 林 歌 宏 子
川 田 剛 水
北 村 玄 水
金 寄 靖 水
小 西 甫 水
小 川 吟 水

大阪吟水会

〒601 京都市南区吉祥院中島町三〇九ノ
電話〇七五(六九二)〇二二八番

琵琶三美会
倉 矢 吹 旭 美 津
田 中 鵬 水
富 山 旭 貴
西 村 旭 富
一 坊 寺 旭 清
外門人一同

〒370-12 群馬県高崎市岩鼻町局前二四七
電話〇二七三(四六)二〇〇六番

宗家針谷錦古

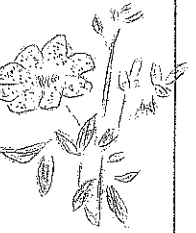
全期協関東副部长
テイチクレコード専属
群馬琵琶連盟会長
日本錦古流総本部長

暑 中 御 見 舞			
〒160 東京都新宿区西新宿六ノ三ア一三 山崎錦幽方 電話〇三(三四二)一〇六〇番	日本芸術琵琶 普絃会々員一同	〒604 京都市中京区高倉通丸太町下ル 坂本町 電話〇七五(二一一)二〇八九番	薩摩琵琶高昇流家元 泉勝院 峰 口 高 昇
〒569 高槻市雨給持寺町 公団住宅三〇八ノ二〇四 電話〇七二六(九六〇)八五一六番	吉 井 良 三	〒617 向日市上植野町山の下一二 電話〇七五(九三二)二〇四六番	櫻 井 旭 富
〒141 東京都品川区西五反田四ノ八ノ二 電話〇三(四九一)八三三二番 本 部 支 部 京都・名古屋・湘南・東北		琵琶芸術協会 四絃富士会 錦心流琵琶秋声会 前 田 秋 声	
〒125 東京都葛飾区鎌倉四ノ三九ノ四 電話〇三(六五八)一九四七番		新入門者に捧ぐ 薩摩桃山琵琶製頒 日本琵琶楽協会々員 柏 木 篁 道	

暑 中 御 見 舞	
〒164 東京都中野区中央一ノ三二ノ六 電話 (三六一) 七七四〇番 薩摩琵琶 仲 川 秀 邦 (旭 朋)	〒603 京都市北区平野宮西町六四 電話〇七五(四六二)二四二三番 京都琵琶協会 日本琵琶楽協会 同 関西支部 平 井 春 嶺
〒662 西宮市松園町十三番二十一号 電話〇七九八(二二)八二〇八番 琵琶一水会神戸支部 理事 琵琶 蓮 水 会 楊 嶽 水	〒810 福岡市中央区春吉二ノ八ノ二 電話〇九二(七六一)〇三二〇番 筑前琵琶嶺派 嶺 旭 蝶 青 山 旭 子
〒160 筑前琵琶 紅 会 東京都新宿区三栄町十六 電話〇三(三五二)四五九一 大 師 範 押 田 旭 窃	日本旭会

九郎判官義経 (二)

ばくすら



平家物語一平家は去年の冬の頃より(中略)西は一の谷を城廓に構へ、東は生田の森を大手の木戸口とぞ定めける。その間、福原、兵庫、板宿、須磨に籠る勢、山陽道八箇国、南海道六箇国、都合十四箇国を打ち従へて、召さるる所の軍兵十万余騎とぞ聞へし。一の谷は、北は山、南は海、口は狭くて奥弘し。岸高くして屏風を立てたるに異ならず。北の山際より雨の海の遠浅まで大石を重ね上げ、大木を伐りて逆茂木に引き、深き所には大船どもをそばだてて挿挿にかき、城の面の高櫓には四国鎮西の兵ども、甲冑弓箭を帯して雲霞の如くに並み居たり……

向わせ、自分は僅かに七十騎を率いて一の谷のうしろ、鴨越へ向う。雪猶消え残る深山の道を尋ねて、六日も既に日暮れに及んだ時、武蔵坊弁慶がこの山の一人の獵師を連れて来た。義経が、では道案内を頼む、これから平家の城廓一の谷へ落とそうと思ひ、と云えば老獵師は、とんでもないこと、恐ろしい絶壁で人間の通れるところではないという、そして義経の問いに対して鹿は通ると答えると、鹿も四ツ脚、馬も四ツ脚、鹿が通って馬が通れぬ筈はない、是非案内を、と云えば、自分は老齢ゆえ息子に案内させようと、十八才の少年を連れて来た。直ぐに元服の上鷲尾三郎義久と名乗らせこれに案内させて鴨越へ向ったが、以後義経に仕えて死生を共にした。

かに申されけるは、これは三位殿(俊成)に申すべきことありて忠度が参りて候、たとへ門はあけられずとも、此の際まで立ち寄り候へ、申すべきことの候。之を聞いて俊成は門を明けて対面する。一君(安徳天皇)すでに帝都を出てさせ給いぬ。一門の運命、今日早や尽き果て候。それにつき候ひては、(中略)此の後、世静まりて、撰集の御沙汰候はば、是れに候巻物の中に、さりぬべき歌候はば、一首なりとも御恩蒙りて、草の陰にても嬉しと存じ候はば、遠き御守りとこそそなり参らせ候はんづれとて、日ごろ詠み置かれたる歌どもの中に秀歌とおぼしきを、百余首書き集められたりける巻物を、(中略)俊成の卿に奉らる。

勅選和歌集の御企てがあれば、俊成卿は選者になられるに決っているから、その時は一首でもよいかから私の歌を入れて下さい。私は一門と共に亡びて行きますが、それが唯一のお願いです。と云うのである。俊成がこれを承諾すると、忠度は喜んで、今は浮世に思ひおく事なし、さらば暇申してとて、馬に打乗り兜の緒を締めて、西をさしてそ落ち行き給ふ、三位、あとを遙かに見送りて立たれたれば、忠度の声とおぼしく、前途程遠し、思ひを雁山の夕べの雲に馳すと、高らかに口ずさみ給へば、俊成の卿もいと哀れに覺へて、涙を押へて入り給ひぬ。

忠度一の谷に討死してから三年後、文治三年に勅選の御沙汰があつて、俊成は千載集を作った。「ささ波や志賀の都は荒れにしを、昔ながらの山桜かな。」忠度の作である。但し本人は当時朝敵となつていたからというので、その名をかくし、「よみ人知らず」として入れたのであつた。

大君のみ楯

編集部



崇峻天皇の二年(五八九)七月、河内の国志紀・淡川の野(今の八尾・東大阪)には、烈しい戦いがくりひろげられていました。かねてから排仏か集仏かをめぐつて、さまざまの政争をくり返していた物部(ものべ)蘇我(そが)の二大豪族が、ついにそれぞれ総力を結集して、一大決戦の火ぶたを切つておとしたのです。

神の国から争いの世へ
戦塵はもうもうと天に連なり、軍兵の雄たけび、矢のうなりは野に満ちました。「日本書紀」はこのあたりから、ようやく現実的な体臭を持ち文章に迫力を増します……ヤマトの国に、やつと肉体・肉声をもつた人

問たちが跳梁はじめたのです。上古の神神たちの大らかな哄笑、怒り喜び悲しみの、くもりなき明らかな心は、すでに失われました。人智が開けるに従い、あやしみのくまや、かげりが生まれます。神の国から下界へ下りた人間たちは醜く争ひ、妬み傷つけあひつた。陰謀、戦争、物欲はとどなくふくれ、社界は複雑怪奇なすがたを帯びてゆきます。

旧来の勢力の頂点にたつ古い名門貴族物部(ものべ)と、外来文化と新興勢力の代表者蘇我(そが)。この決戦は、蘇我の勝利におわりました。神代の昔から勇名をうたわれた物部のものふたちも、蘇我の政事力や物量作戦にはかまいませんでした。首長の守屋は殺され、軍は大敗、その屍(しかばね)は恵我川原を埋めつくしました。

勇士・萬の孤独な戦い
物部守屋の従者に、捕鳥部(ととりべ)の萬(よろず)という勇士がいました。彼はただ一騎で和泉の国へ落ち、物部の旧領地で兵をあつめて最後の戦を交えようとした。しかし萬に従う兵士もすでになく、硬骨の彼と決心したのです。愛する妻に別れを告げ、ひとり山へこもつた萬を、数百の精兵が、ひしひしととりかこみます。「萬、きもの破れ垢つき、形色(かお)憔悴(かし)けて、弓を持ち剣を帯きて独り自

から出て来れり」。 たつた一人の萬は、ちえをめぐらせて、さんざんに敵兵を悩ませます。竹やぶにかくれて、縄を竹につけてひっぱり、おのれがいるようにあざむいて、そこへ群がりよせた敵兵を片づばしから射殺し、「一つとしてあたらざることなし」。

萬は飛鳥のようにここと思えばまたかしこと逃げて戦いました。しかしついに膝を射抜かれて倒れ、倒れた萬に矢は雨のように降ってきます。彼はそれを払いながら絶叫しました。「おれは天皇(すめらみこと)の楯として今まで戦ってきたのだ。守屋の大連(おおむらじ)さまが、すめらみことのためだとご命令になったから、おれは戦つたのだ。それをどうして、おれが、すめらみことのために追われ、殺されなくてはならないのだ。たのむ、そのわけを聞かせてくれ。誰か来て、そのわけを話してくれ、すめらみことのために戦つたおれが、すめらみことのために討たれなければならぬ理由を話してくれ……」

「共に語るべき者(ひと)来れ。願わくは殺しとらふることの際(きわだめ)を聞かむ」という萬の悲痛な絶叫に耳をかすものはありませんでした。兵士は折り重なつて萬に殺倒しました。萬はそれでもなお三十何人を殺し、ついにわが弓を折り、剣を曲げて河中に投じ、みづから短剣で首を刺して死にました。萬の死骸は、逆賊として八ッに切り刻まれ、八ッの国で串刺ししてさらされました。その屍を

大雨がぬらしたといひます。

二。二六将校の叫び

昭和十一年二月二十六日の朝まだき。大雪をついて決起した陸軍青年将校たちのかかげた旗には「尊皇討奸」とありました。しかし彼らは叛乱者として直ちに処刑されました。「天皇陛下萬歳」と叫びつつ、天皇陛下の軍に銃殺された彼らは、萬の末裔だったのです。殺される理由を「語るべきひと来れ」という、混乱にみちた彼らの号泣に、答えてやる人はなかったのです。

(田辺聖子「文庫日記」より)

感想



大阪市浪速区 中條 義治 (七十三才)

目も醒める新緑の候愈々御清勝大慶に存じ上げます。私こと朝日新聞夕刊紙上で知り、五月二十七日の貴京絃二十五周年記念演奏会に馳せ参じて拝聴させて頂きました者で、根っからの琵琶好き(と申しまして聴くだけですが)です。とても名演奏揃いで一日を樂ませて頂きましたが、これも真摯な且つ不断的努力を続けられる王幹植村真水様の人徳を敬慕しての集まりであろうと存ずる次第、

お目出とうございます。

当日受付けて頂戴しました京絃三〇〇号御祝寄せ書の内、東京の生重定さんの「草庵私語」を拝読。これに就て私もこの頃思っています。琵琶界の沈滞に対する私見を左に申し上げます。但しこれは飽くまで私見であって、琵琶を手に取り弾奏したことも無い素人の思いの上りでお恥しいことですが、私を第三者の批評者としてお聞き逃し願ひ上げます。①値打ちのある琵琶が今日衰えんとしているのは何故か。それは範圍が狭くて現代の若い人々から敬遠されているから。即ち語る物語りは古代中国のこと、元寇以来の日本の敗戦後大和魂の指針を失った若者の好みに合わぬ。

②曲(メロディ)が非音楽的の部分があつて折角の歌詞を生かせない。これは錦心流でも筑前でも、激闘部分であまりにジャンジャカと琵琶を掻き鳴らす(もう少し静かに戦いや悲しみを表現する方がよい)ので、独りよがりのような感じがする。琵琶、即ち幻想的なから蟬丸や耳なし芳一が弾じたであろう琵琶は、もつと幽邃なメロディであつたらう、という感じがします。あまりジャンジャカやるのは興ざめです。「草庵私語」の如く、今はそれを実践に移して行く段階と思ひます。③新しい詞形の作歌。現代人にマッチした作歌形態、これが大事です、と申しても、琵琶は元来古典詞型ゆえ余り薄つべらな語り口でも困ります。即ち現代の人々に平易にわ

故 錦穰全集

テープ全二十四巻

故人七回忌にあたり六十三曲収録の別冊歌詞集を和装頓にて刊行。テープ五巻以上お申し込みの方に添付頒布。一巻より十五巻まで演奏後に錦穰自身による芸談を収録。

各巻 三、〇〇〇円 (送料二〇〇円)

お申込み先 錦びわ本部

〒176 東京都練馬区旭町二ノ二二ノ四 電話〇三(九三〇)四四五八番 連絡先 京 絃 社

かつて、しかも荘重なものでなくてはなりません。④語り物。今迄の物語の上に更に戦後のことも感動すべき事件、悲劇、美談等生活の指針となり、又後世に伝えて行くべき物語、人倫として奨めるべきこと。⑤私が耳にさわやかに感じる琵琶とは、声がよく、何を云っているのかハッキリ判り、落つきがあり、あまり語尾を引張らず、聞のびせずに語尾を引張る(ひきづる)のはよくない。一つの流儀としても感心しない。⑥(省略) 以上私の感じたことを卒直に申しました。 一原文のまま (以下省略)

大鳥神社祭礼に琵琶献奏

大阪堺市の大鳥神社は日本武尊と大鳥連祖神のお二方が祭られ古来文武の神として有名である。境内には二千数百株の花菖蒲が今を盛りと咲き乱れ六月一日から十七日迄菖蒲祭が催され十七日(旧)昼から大阪琵琶同好会の協賛で神社特設舞台に於て新撰組、別所、鈴木、青柳、那須与市、作花旭友、秋風故郷の山、辻旭城、姫ゆりの塔、石橋旭嶺、戦艦大和、田中歌水、若き敦盛、天津八千代、坂崎出羽守、中島旭穂、山吹の夢、尾山旭瑞常、以上献奏。外に剣舞、扇舞、詩吟、尺八など。

民族芸能を守る会六月例会

六月十九日(夕)六時東京上野本牧亭。琵琶楊貴妃、水藤五郎氏の外落語万才等六番。

故絃友追善演奏会

六月二十四日(旧)昼東京文京区本郷浄心寺、主催輝水会絃友同志、後援輝水会本部。薄陽江、故山田半水、天目山、故窪田錦晃、静、故輝錦葉(以上録音)、重衡、丸田穂容、屋島、城崎凌精、掛合夜討曾我、錦統、錦凌、絃、錦穂、紅葉狩、輝錦正、菅公、輝錦耕、竜の口、輝錦舟、湖水乗切、輝錦貴、山科の別れ、輝錦統、茨木、都穂鳳、同、都錦穂、川中島、輝錦凌。

筑前琵琶追悼演奏会

七月一日(旧)昼神戸市生田公会堂、主催神戸

旭会(幹事長田中旭昇氏)黙禱、全員、秋風故郷の山、駒栄旭良、絃旭昇、坂崎出羽守、伴旭友、滝善三郎正信、丸尾旭宝、絃旭昇、那須与一、熊手旭辰、对王丸、木庭旭山、二〇三高地、宮垣旭璋、若き敦盛、富樫旭恵、曾我兄弟、伊藤旭暢、新撰組、大絃田中旭昇、小絃浜本旭好、由比が浜、柴田旭堂、故人を偲びて、松岡旭岡。

筑前琵琶紅会演奏会

七月四日(旧)昼東京日本橋三越劇場。押田旭窮女史主宰の紅会(くれなゐかい)は毎年大会を催して人気を博しているが今回は従来のメンバーの外多数新人を加えそれに薩摩、錦心流、錦の三名人と女流剣舞や日舞を組入れて想を新たにし好評、盛会裡に終始した。司会はNHK鈴木健二アナウンサー。会歌、一同、坂本竜馬、伏見、浜野、宇野、吉野山懐古、福田、岡田、絃原島、佐久間、青木、本能寺、深谷、絃錦穂、二〇三高地、石井旭良、壇の浦、藤内旭須美、四條畷、三上旭鳳、城山、清川嵐舟、堅田落、若宮旭登、秘曲師長、三上、藤内、石井、戻り橋、阿部秋子、寿猿、宮武旭豊、秋風故郷の山、原旭潮、原田旭柳、小笠原旭星、絃原島、玉黄金、仲川旭朋、絃押田、小栗栖、原島旭粧、須磨の敦盛、都錦穂、湖水渡り、押田旭窮、剣舞白虎隊、若水桜松社中、舞踊新曲月見草、藤間英紗、歌原島、絃押田、三上、琴米川。

ものがたり琵琶演奏会

七月七日(出)昼三時東京港区虎の門発明会館ホール、主催杉山雅俊会後援会、後援日本琵琶楽協会外(千五百円)。石童丸、若宮旭佳、巡礼お鶴、藤尾穂静、絃錦穂、羽衣、大関英子、本能寺、佐藤采水、井伊大老、高田采水、湖水乗切、座間姫水、小栗栖、友吉鶴心、秋風故郷の山、若宮旭登、立方一、千手の前、軽部岳瑞、敦盛、木原綾子、常盤の前、桑名洲聖、对王丸、藤巻旭鴻、吉野の春、穂菟、穂鳳、穂静、都錦穂、川中島、山口速水、物語琵琶青山播磨、会主杉山旗水。

錦びわ春の勉強会

七月八日(旧)昼東京新宿文化センター四階和室(会長水藤五郎氏)。啄木の歌、水藤五郎、白虎隊、水藤まりこ、母常盤、油科、黒田武士、上田、井伊大老、網野穂菟、盛綱先陣、鈴木桜陽、屋島懐古、斉藤桜玲、大高源吾、木原錦秀、新撰組、小沢錦弥、耳なし芳一、水藤五郎、怪談ばなし、一竜斎貞山、道成寺、斉藤桜嵐、本能寺、村木桜柳。

京都琵琶協会七月例会

梅雨の中休みで気候も暑くなく曇り空の七月八日(旧)昼一時本部平井会長宅で開催。例により数氏研修演奏が披露されたが、平井氏が新門下生山田明嶺嬢との「五條橋」の合奏は入門後未だ日の浅い山田嬢の進歩著しく特に奇麗な崩れの弾法は師の特技をよく採り入れ